

古辞書における部首排列の基準 [下]

——新撰字鏡と類聚名義抄——

福 田 益 和

YOSHIKAZU FUKUDA

How to Classify "Bushu" in the Old Dictionaries Published in Japan

(六)

新撰字鏡における部首排列の基準が玉篇の部首の各意義群を濃厚に継承し、一方では玉篇の部首排列自身にもその性格を有する類似字形による排列意識をも加味しているということは、以後あらわれて来る玉篇系統の辞書の部首排列についても必ずやその影響を及ぼしているものと推察される。昌住が新撰字鏡を十二卷に増補するに際し「玉篇」を参照したことは序文の明記する通りである。ここで問題としてとりあげる類聚名義抄も「観智院本篇目」の末尾の、序文というより凡例と言うにふさわしい文章の中で「依玉篇」と「玉篇」の二字を明記しているのである。ところが、「野王玉篇」の残巻の部首などに照しても、原本玉篇の部首を踏襲していると考えられる大広益会玉篇のそれに照してもその排列次第はいずれも相違して居り、いかなる理由をもって「玉篇に依る」と言ったのかその真義を検討する必要が生じて来る。類聚名義抄の部首排列基準を考察するにあたり諸先学がこの矛盾点をいかに解釈すべきかという点よりまず考察の出発点とされるのは当然なことと言うべきである。そこで本稿においても「観智院本篇目」の末尾の一文を掲げ、諸先学の解釈を参考としながら、名義抄編著者の真意をうかがってみようと思う。

「立篇者源依玉篇^一。於二次第一取相似者置隣也。於三字数少者集為三維部^二。」

古辞書における部首排列の基準 [下]

右の一文について、岡田希雄氏は、「立篇（「篇を立つることは」と訓むのであらう）は玉篇に依り、本文中の配列は字形の似た者を隣に置き配列すると云ふ意味であるらしい」と解釈して、更に玉篇および類聚名義抄の部首排列順の相違することを述べ、この矛盾点の説明として「玉篇の部首の順序を名義抄が踏襲したと云ふ事では無くて、名義抄は広韻・唐韻等の如く韻によりて文字を分類する事をせずに、玉篇のやうに部首で分類するのであると云ふ位の事であるらしい」と言われる。しかし、「立篇」云々についての岡田氏の解釈と矛盾点の説明とは論理的に明快でないうらみが残る。氏は矛盾点の説明の中で「玉篇の部首の順序を名義抄が踏襲したと云ふ事では無く」と言われるが「立篇……」についての氏の解釈には「部首」についてのことは一語もみられないのである。ただ後半において「本文中の配列」と言われているから「立篇」云々は部首順についてのことと考えて居られるかもしれないが、部首と本文との関係についての把握が截然としていない。それ故、本文中の字順については字形の似た者を隣に置き配列することに言及しながら、その本文そのものにおける追求は全くなされず、ただ部首に関して類聚名義抄は「玉篇のやうに部首で分類するのである」意というごくく漠然とした説明に終っている。ここでは「於次第取相似者置隣也」の十字が「本文中」のことについてのことだという速合点も加わっているために玉篇と類聚名義抄との関係が何ら具体性をもってあらわれないのである。

次に、中田祝夫氏は^(註19)「立篇云々」については、「ある文字がいろいろな扁旁の文字であるかを判断することは玉篇によったものである。しかし当初は玉篇に依ったが、玉篇そのままでないことのために、もとは云々といったのである」と言われ、「立篇云々」が部首の排列順についての立言ではなく、文字通り篇旁の立て方についてのことであることを明確にして居られる。ひきつづき、「於次第」云々について、これが部首排列についてのことだと考え、「イ(一)・イ(二)」、「走(三)・走(五)・麦(六)」などは相似しており、また「口(四)・目(五)・鼻(六)・見(七)・日(八)・田(九)・月(一〇)・舟(一一)」などは意味上の連関連想もあり、字形もまた似ていると具体的に部首をあげながら、部首の次第が字形および意味の両面にわたって相似たるものを隣に置くということの意味であると説明される。筆者は氏のことは注目するものであるが、ただその後で、「支那の玉篇に依らない新しい名義抄の方針であった」とされるにはもっと説明の必要があるように思う。

渡辺実氏は^(註20)、名義抄仏巻二十部首(人・イ・走……田・肉)について玉篇類と比較検討せられ、名義抄の部首排列の基準は「玉篇に依る」・「相似た者を隣に置く」の二原理を中心としていることを述べて居られる。ここでは岡田氏、中田氏とはちがって「玉篇」との具体的関係が言及されて居り注目すべきところである。

一方、酒井憲二氏は^(註21)部首の排列について中田氏・渡辺氏の言われた「相似たものを取りて隣に置く」という原理が部首のみならず本文中の文字排列についても適用される原理であることを明らかにして居られる。ただ、氏はこのいわゆる「類似字形排列意識」を強調せられたために、「類似意義排列意識」について「考慮すべきことは論を俟たない」としながらもその吟味が十分になされていない感がする。それと渡辺氏の言われた「玉篇に依る」原理を部首の排列については無関係のものと断じて居られるごとくである。

以上、先学の御説を眺めて来たのであるが^(註22)筆者自身は渡辺実氏の御説にひかれるものである。筆者は篆隸万象名義、新撰字鏡の部首排列の検討の結果いずれも類似字形、類似意義による排列の要素があることを認めた。そうなると類聚名義抄も「玉篇に依る」と明記している以上その部首排列に右の二つの要素が加味せられていることは十分推察できることで玉篇系統の部首排列の流れが一貫していることをうかがうことができると思う。酒井氏によって一歩後退したかに見える「玉篇」の部首排列の要素、特に類似意義による排列意識を改めてここで見直そうというのが筆者の草稿における意図である。

(七)

さて、観智院本篇目末尾の「立篇」云々の一文はいわゆる原本系の類聚名義抄である宮内庁書陵部現蔵の「凶書寮本類聚名義抄」には無かつたであろうからこの一文をもつてただちに原名義抄の編著者の意志であるとは言えないであろうが、右の凶書寮本の法部一帖に見える二十の篇目は観智院本のそれに数においても次第においてもそのまま一致しているのであって、部首の排列次第に関しては「立篇」云々の記事は原名義抄編著者の意志にも通じて行くものと考えてさして逕庭はないものと考えられる。そこで「立篇者源依玉篇」の解釈であるが、これは酒井氏の言われる通り、篇目についてはどういう部首を立てるか、各文字についてはどの部首に帰属させるかという点について範を玉篇に仰ぎ玉篇に源泉を求めたというふうにとるべきであろう。ただここでいう「玉篇」なるものが顧野王の原本玉篇であるのか、又は後の改刪本であるかは明確ではない。岡田希雄氏も言われるごとく、玉篇の改刪本としては陳彭年^(註24)重修本の他に、「玉篇抄」(日本国見在書目録)、「釈慧力撰像文玉篇」・「道子趙利正撰玉篇解疑」(謝啓昆「小学考」)その他があった由で

あるが、いずれも部首の数や排列次第についてはこれを改めたとは考えられないからここでは直接問題にする必要はなからうと思う。次に「於次第取相似者置隣也」であるが、「相似者」とは単に、字形の類似のみならず意義の類似をも意味するものと解すべきであって筆者は後述するごとく意義上の類似が背景にあってそれを字形上の類似によって統一したものが類聚名義抄の篇目であると思う。本来「相似者」とは、はなはだあいまいな表現であり主観に左右されやすいものである。名義抄の二〇部首についてその中のある部首の所在を知るのに単なる連関・連想による字形上の類似を基準にして容易にさがし出せるものであろうか。字形上の類似を部首排列の唯一の原理と仮定したら、その字形についてのいくつかの類型を考え、それぞれのグループに部首を収めることによつてはじめて整然としたものになり、利用者にとつても便利なものになるはずである。類聚名義抄の部首の次第を眺めてみるに、右に述べたごときそれぞれの類似字形相互のまとまりが一向に看取されず、酒井氏の表によつてもそれを見ることはできない。氏自身にも、この類似字形のタイプについての全体的な説明はみあたらない。これでは名義抄の部首の所在を知るのに甚だ不便と言わざるを得ない。例えば部首「示⁽⁶¹⁾」の所在を知るのに単なる字形上の類似からこれが61番目の部首であることが容易にわかるであろうか。「示^(ネ)」が「衣⁽⁶⁰⁾」や「禾⁽⁶²⁾」と字形の上で類似していることは確かに言えることであるが、それには「衣」・「禾」部首の所在が既に判明しているという前提がなくてはならない。すなわち、「衣」又は「禾」部首の所在がはっきりし、その次に「示」部首の所在を知ろうとする場合には、「類似字形」という点からその見当はつくが、「衣」や「禾」部首の所在が明確でなければ、「示」部首の所在については一向に見当がつかないのである。故に高山寺本などに見られるごとく「仏宝類字書略頌曰」として部首を五言八句に仕立てた偈頌の形式にして暗記してしまおうとする傾向が尾を引いて

行くのである。高山寺本の前身と考えられる「六帖字書」^(註2)はその篇立を残すのみであるが、その篇立所収の各部首には四声点と字音とがつけてあるところから見ると、同じ四声点、字音注記のある観智院本に二箇所「為頌」(仏上)、「為頌曰」(法上)の注記があることから考えて、「六帖字書篇立」もあるいは暗誦に便ならしめんがためにつくられたものかもしれないし、観智院の場合も偈頌形式の名残りを示していると考えてよいであろう。いずれにしても原名義抄の部首排列の基準は早くから忘れ去られていたものであろう。「於次第」云々の記述のあいまいさもその故である。しかし、原名義抄編著者の時点に立ちかえる時、その部首排列について工夫を凝らさなければならぬ。筆者は篆隸万象名義・新撰字鏡・類聚名義抄の部首排列を比較検討することによって、ここに「意義類聚」の要素が一貫して流れていることを認めるものである。字形類似の排列はその各意義群の内部又は意義群相互をむすびつけるものとして加味せられたものと考えるものである。そしてこの事實は既述したごとく玉篇そのものに顕著に見られたことであつた。以下、観智院本についてその部首排列を具体的に検討してみよう。酒井氏の系統表をも参考にしながら、両者の相違を明確にしてみる。

(八)

観智院本一二〇部首の中、末尾の雑部については、意義による類聚の要素が認められないのでこれを除き、「人⁽¹⁾」より「酉⁽¹⁰⁾」までの部首について検討をした結果を表にしたものが次にかける「類聚名義抄部首排列基準一覽表」である。

福田益和

四

部首	意義	備考	部首	意義	備考
力 ⁽⁸³⁾		(力 ⁽⁸³⁾ , 羽 ⁽⁸⁵⁾ , 毛 ⁽⁸⁶⁾ , 食 ⁽⁸⁷⁾ , △ ⁽⁸⁹⁾) 瓜 ⁽⁹⁰⁾ , 𠂔 ⁽⁹¹⁾ , 欠 ⁽¹⁰¹⁾ , 又 ⁽¹⁰²⁾	皮 ⁽¹⁰³⁾		(車 ⁽¹⁰⁴⁾ , 鬼 ⁽¹¹⁷⁾ , 風 ⁽¹¹⁸⁾ , 酉 ⁽¹¹⁹⁾)
器		瓦 ⁽⁵³⁾ } <器皿・調度> 缶 ⁽⁵⁴⁾ }	動物		酉 ⁽⁴³⁾ <牛馬・雑畜>に近接 馬 ⁽⁴⁵⁾ } <牛馬・雑畜> 革 ⁽⁴⁹⁾ }
皿		斤 ⁽⁸⁹⁾ 矛 ⁽¹¹⁷⁾ } 矢 ⁽⁹⁵⁾ 支 ⁽¹²⁰⁾ } 皿 ⁽¹¹⁰⁾ 丿 ⁽¹²³⁾ } 方 ⁽¹¹¹⁾ 欠 ⁽¹²⁴⁾ } <辞・雑> 弓 ⁽¹¹²⁾ 皿 ⁽¹³⁴⁾ } 斤 ⁽¹¹³⁾ 又 ⁽¹⁴³⁾ } 戈 ⁽¹¹⁴⁾ 又 ⁽¹⁴⁹⁾ } 刀 ⁽¹¹⁵⁾ 爪 ⁽¹⁵¹⁾ }	(集会・雑畜)		車 ⁽⁵²⁾ <牛馬・雑畜>に近接 羊 ⁽⁸¹⁾ 亀 ⁽⁸⁵⁾ } 鼠 ⁽⁸²⁾ 𪚩 ⁽⁸⁶⁾ } <動物> 虫 ⁽⁸³⁾ 魚 ⁽⁸⁷⁾ } 鬼 ⁽⁹⁶⁾ 隹 ⁽¹⁰⁵⁾ } <辞・雑> 韋 ⁽⁹⁷⁾
調		力 ⁽⁸³⁾ =刀 ⁽⁸⁴⁾ =羽 ⁽⁸⁵⁾ 毛 ⁽⁸⁶⁾ =食 ⁽⁸⁷⁾ =金 ⁽⁸⁸⁾ =△ ⁽⁸⁹⁾ =瓜 ⁽⁹⁰⁾ 𠂔 ⁽⁹¹⁾ =皿 ⁽⁹²⁾ =血 ^{(92)'} 欠 ⁽¹⁰¹⁾ =又 ⁽¹⁰²⁾ =支 ⁽¹⁰³⁾ =𠂔 ⁽¹⁰⁴⁾ =皮 ⁽¹⁰⁵⁾	酉 ⁽¹¹⁹⁾		車 ⁽¹⁰⁴⁾ =羊 ⁽¹⁰⁸⁾ 𪚩 ^{(114)'} =鬼 ⁽¹¹⁷⁾
度			雑 ⁽¹²⁰⁾		「首・辛・不・𠂔・白」 等の各部首
又 ⁽¹⁰⁴⁾					

各部首につけられた算用数字は名義抄の部首番号。ただし、編入部首については、「谷⁽⁸⁷⁾」のごとくダッシュの符号を用いる。

各意義群の名称は、篆隸万象名義・新撰字鏡のそれに準じてつけたもので便宜的なもの。

備考欄の中

- ・()印でくくった部首は、篆隸万象名義の意義群と対照した場合、同一意義群に収められていない「例外部首」。
- ・□印でくくった部首は、新撰字鏡の部首(算用数字及び意義の名称も、新撰字鏡のそれである。)で、名義抄の各意義群に流れこんだと思われる連続部首ないしは近接部首。(ただし、序列は、筆者が整理したもので、新撰字鏡においては、前後の乱れがある。)
- ・||印でむすんだものは、例外部首を中心に類似字形排列が認められることを示している。編入部首はたいい字形上の類似によるので、必要と思われるもの以外は特にあげなかった。

右の一覧表を観てまず気がつくことは同じ意義群でありながら重複してあらわれるものがあるということである。すなわち「形体(人体)」「(10)~(28)・(43)~(49)」、「動物」(29)~(36)・(72)~(74)・(105)~(119)、「地」(37)~(42)・(50)~(56)の各意義群で、こうした事実が生じたのはそこに類似字形排列意識が加味せられたためであろう。よって意義の分断が生じ重複した体裁をとることになったと考えられる。ところで、右の重複意義群の中、「(29)~(36)・(72)~(74)」(動物)を類似字形排列のために生じた分裂意義群と考えて無視すれば、「形体(人体)……衣・食・住……草木……動物……雑」のごとき序列があらわれて来るのであるから、これは新撰字鏡の各意義群の序列にそのまゝ対応していることになる。人間中心の排列意識は名義抄にも流れていると言えないであらうか。更に右の意義群の中、「衣・食・住」を除くと、「形体(人倫)……草木……動物……雑」となり、篆隸万象名義・新撰字鏡・類聚名義抄共通の意義群の序列となつてそこに一貫性があることを認めることができる。そしてこの序列は、人倫・形体が草木(植物)・動物に優先している点から

吉田金彦氏のいわれる「類書式分類法」の範疇に入るべきものと考えられる。

次に、各意義群に収められた部首についてはその意義群に収めるには問題のある例外部首もいくつかあるので一覽表の備考欄にかかげたごとくである。よってこの例外部首を中心に検討する必要がある。以下具体的に説明をする。

。人(1)ゝ麦(6)〔辞・言動〕

新撰字鏡の「辞・雑」所収の「走・疋・彳・匕・麦」の五部首がここに含まれている点より、「辞(言動)」グループとした。「人」部を第一に置いたのは人間中心の意義類聚の方針からであり特に渡辺実氏の言われるごとく仏巻の名とかかわりがあるであろう。「疋(3)・匕(4)」の排列は酒井氏の御説の通り、「匕」字が写本の字体として之繞に通じて用いられる字形上の類似によるもの。「麦」部も「走」との字形上の類似によってここに置いた。新撰字鏡の「辞・雑」所収の部首でもある。西念寺本では「麦・走」の順になっているとは岡田氏の言であるが、天理大学附属図書館蔵本によってそれが「部首目録」のみの序列であり、本文の方は観智院本と同様に「走・麦」の順になっているとすることである。^(注28)

。一(7)ゝ十(9)〔員数〕

玉篇類の第一意義群「員数」グループに対応するものであろう。例外部首「一ノ(8)」は「十(9)」との字形上の類似による排列とみることができる。

。身(10)ゝ手(28)〔形体(人体)〕

新撰字鏡の「形体」に収められる「身・頁・目……」等の十一部首、新撰字鏡の部首排列の中、類似字形排列の加味せられた「丹・舟」、「月・肉」の四部首がここにふくまれていることに注目すべきである。明らかに「形体(人体)」の意義による排列と思われる。例外部首「女

(12)について酒井氏の説明は苦しいが(横一アクセントを認める立場)、この「女」が篆隸万象名義において「形体(人体)」の第一部首「頁(36)」の直前に位置する「女(35)」であり、又新撰字鏡の「形体」所収の部首でもあることを思えばここにふくまれて疑問はないといえる。氏は又、「鼻・見」、「頁・彳」等の部首について字形類似による排列を言われるが、筆者の立場からすると、同一意義のグループであるためにここに収められたものであり、字形類似意識は必ずしもはたらいではないように思われる。他の例外部首が字形上の類似によるものであることは一覽表に記した通りである。

。(29)ゝ収(36)〔動物〕

例外部首が多いのは字形上の類似による排列意識がはたらいであるからであろう。「匕(34)」は康熙字典によると「魚腸」(爾雅・積魚)、大広益会玉篇「玄鳥」とあり、玉篇類では「彳」部首と近接した部首でもある。よってここに置かれても疑問はない。「木(29)」は「犬(30)」字との字形上の類似であるとともに前項意義群「形体(イ体)」と「動物」意義群を「彳(28)ノ木(29)ノ彳(30)」のごとく字形上の類似によって連結しているのである。他の例外部首「片、兀、収」などが字形上の類似によって排列されたものであることは一覽表に示したごとくである。

。八(37)ゝ地(42)〔地(色彩)〕

例外部首は「八(37)」のみ。この「八」は「動物」および「地」の意義群をむすびつけるために字形上の類似によって次第せられた部首であることは明らかである。他の「大(38)」・「火(39)」などの諸部首は篆隸万象名義ではすべて「天地」グループに収められているものである。新撰字鏡においては「地」グループの「谷(62)」・「水(66)」・「二水(67)」三部首がこれに対応している。「水」部が法の巻の巻頭にあることは巻名の「法」字を初出せしめる部首であるという説(渡辺実氏)、大部首である水部を巻頭におき「引きやすさ」を念頭においたためとする説(酒井

憲二氏)も考えられるが意義による類聚が背景にあることを無視することはできないものと思われる。酒井氏の「表4」において「黒」・「水」部首相互の連結が表示されていないのは字形上の類似がみられなためであって、ここは「地(色彩)」グループとしての意義による排列であると考えられる。

。言(43)・齒(49)〔形体(人体)〕

篆隸万象名義の「形体」意義群に入らない例外部首「言(43)」・「立(45)」・「豆(46)」・「卜(47)」の中、「言(43)」をのぞき他の三部首は新撰字鏡の「辞・雉」に対応し、「言(43)」部は、「足(44)」・「面(48)」・「齒(49)」の各部首とともに新撰字鏡の「形体」に対応している。例外部首「言」が新撰字鏡では名義抄と同じく「形体」に属している点注目すべきことである。大広益会玉篇でも「言」部は「足」部に比較的近接している。

(足(76)……言(90))。酒井氏の「表4」で「言」が前項「フ(42)」と、草体の相似を援用しなければつながらないという説明の苦しさはそこに意義の切れ目があるからに他ならない。

。山(50)・土(56)〔地〕

例外部首「色(53)」および編入部首をのぞき、他の「山(50)・石(51)・玉(52)……」等六部首すべて「地」の意義に入るものである。そしてこの六部首がすべて新撰字鏡の「地」・「辞・雉」所収の部首に対応していることも一覽表に示した通りである。例外部首「色(53)」が「邑(54)」との字形上の類似によることは明らか。酒井氏が「山」以下の数部首について「意味上の連関・連想が主となっているようである」と言われるのは筆者の立場から当然なことであり、その「意味」というのがここでは「地」グループのことになるわけである。

。心(57)・衣(60)〔布帛・装束(衣)〕

例外部首「心(57)」をのぞき「巾(58)」・「糸(59)」・「衣(60)」の三部首はすべて新撰字鏡の「布帛・装束」所収の部首に対応するものである。例

古辞書における部首排列の基準〔下〕

外部部首「心」は立心篇の字形として「巾」部首と類似しているから、字形上の排列と考えることができる。なお、この「布帛・装束」は次項の「稻穀」・「居処」の各意義群とつらなり、「衣・食・住」のグループを形成し、新撰字鏡と同じ排列形式をふんでいる。

。示(61)・米(63)〔稻穀(食)〕

例外部首「示(61)」をのぞき、「禾(62)・来(62)・米(63)」は新撰字鏡の「稻穀」・「飲食」所収の部首に対応するもの。「示」は「示(60)」・「示(61)」・「禾(62)」と次第されている通り字形上の類似による排列で、それも前項意義群「布帛・装束(衣)」と本項の「稻穀(食)」グループとをつなぐ役割をも果している。

。フ(42)・尸(71)〔居処(住)〕

前項意義群「衣」・「食」について「住」グループを次第したものと考えられる。酒井氏は「フ」部首を前項の「糸・衣・示・禾・米」字の有する共通点「フ」を抽出せるものとされるが苦しい説明と思われる。これでは類似字形の概念からはずれてしまうことになる。「米」と「フ」部首の間には明らかに意義上の断絶があるものと思われる。「フ」抽出の説明にしても「門」・「尸」などの部首について理に合わない。むしろ意義による類聚を背景にして考える方が説明しやすい。ただしそうすると、例外部首が「フ」・「尸」・「フ」・「フ」・「穴」・「雨」・「口」・「尸」などと多くなってくるが、新撰字鏡との関係を考慮に入れると「辞・雉(居処)」グループより「尸(71)・尸(72)・尸(73)」の連続部首および「口(91)・口(92)・門(93)」の三部首がこれに対応し、「居処」グループより「門(45)」部首が対応して居り、意義による類聚意識がつよいことがわかる。「フ」・「フ」・「フ」・「穴」・「雨」等の部首の排列については字形上の類似を認める酒井氏の御説を一応認めるにしても、「門・口」より「尸・尸」へつづく説明の中で「門」と「口」との次第についての説明はあいまいで納得いかない。なお、「尸」は篆隸万象名義では「疾

病」グループの第一部首「尸⁰⁴⁴」としてあげたが、前項「居⁰⁴⁵」グループの末尾の部首「尸⁰⁴³」とは隣接部首であって、名義抄における「尸」の編入部首として「尸」があるということにはそれなりの深い因縁があることを見落してはならない。

。𠂇⁰⁷²・鹿⁰⁷⁴〔動物〕

例外部首「尸⁰⁷³・尸⁰⁷³」は字形上の類似による次第であると思われるが、篆隸万象名義の「動物」グループ所収の「鹿⁰⁷²」・「𠂇⁰⁷²」・「虎⁰⁸³」各部首の前項の意義グループ「天地」所収の終りに近い部首「尸⁰⁴⁴・尸⁰⁴⁴」に対応するものであり、一方新撰字鏡では「辞・雜」所収の「尸⁰⁴³・尸⁰⁴⁴」の連続部首であって、玉篇系統の辞書において「尸」・「尸」二部首はつねに連続部首として次第せられている。

。尸⁰⁷⁵・尸⁰⁷⁶〔疾病〕

両部首「疾病」の意義による次第であると思われる。「鹿⁰⁷⁴」・「尸⁰⁷⁵」は意義群相互（すなわち「動物」⇔「疾病」）の連結のために字形上の排列が加味せられたものであろうが、「尸⁰⁷⁵・尸⁰⁷⁶」の排列について同じ字形上の類似による排列とみるには無理があると思われる、意義類聚とみなくてはならない。編入部首「夕⁰⁴⁴・多⁰⁴⁴」の中、「夕⁰⁴⁴・多⁰⁴⁴」二部首は篆隸万象名義の「天地」所収の中、字形上の類似によって排列されたと考えられる「夕⁰⁴⁴・多⁰⁴⁴」に対応し、この連続部首が名義抄においても字形上の類似によって次第された連続部首としてあることに注意すべきである。

。子⁰⁷⁷・寸⁰⁸⁰〔員数・方角〕

「員数・方角」グループをなすものである。酒井氏は「十・ナアクセスントグループの引き出し役としてやはり前部がつへん」との字形上の相似を見るべきであろう。」と説明して居られるが無理がある。こもやはり意義による類聚とみるべきである。例外部首「斗⁰⁴⁴・軌⁰⁴⁴」の二部首については、「斗」は篆隸万象名義・新撰字鏡ともに「器皿・調度」類に収

められているが、名義抄では「斗」を容量の単位と考え、「員数」の部に類に転用したものであり、「軌」は字形上の排列とも思われないし不審である。名義抄の本文では「古旦反―日出光」（法下一四二）とあり、玉篇類では「天地」の部に類に収められている。ただ、名義抄において「軌⁰⁷⁹」の近くにある「夕⁰⁷⁶」の編入部首「夕⁰⁴⁴・多⁰⁴⁴」が万象名義では「軌⁰⁴⁴……夕⁰⁴⁴・多⁰⁴⁴」と、同じ「天地」グループに属し、しかも近接して排列されていることに関係があるであろうか。なお「ター子」のごとく酒井氏は表の中で字形上の排列を示して居られるがこの両部首の間には、疾病・員数方角という意義の境界を認めることができるので同意できない。

。艸⁰⁸¹・竹⁰⁸²〔草木〕

「草木」の部類を収めたもの。新撰字鏡においても「草木」の部類に収められている。酒井氏は「艸・竹・力」には力が字形の中核をなす強い印象を与える」として、字形上の連結を強調されているが苦しい説明に思われる。「寸・艸・竹・力」の排列について字形上の相似を言うのは付会に思われる。この四部首については意義による類聚の立場からではなくては説明がつかないように思う。ただし、僧の巻の巻頭部首に、部首中最大の所属字数を収める「艸」部を置いたとする酒井氏の御説はうなずけるところであって、意義類聚の立場からも認めることができる。

。力⁰⁸³・反⁰⁸⁴〔器皿・調度〕

「器皿・調度」類を排列したものと考えられる。編入部首をのぞく十二部首の中、「力・羽・毛・食・△・瓜・△・欠・又」の九部首は例外部首となるが大体字形上の類似による排列という立場から解決することができる。（一覽表参照）ただし、その中で「羽⁰⁸⁵」・「毛⁰⁸⁶」の次第は字形上の類似というよりこの二部首が万象名義で同一意義「動物」グループ所収の部首であり更に「羽⁰⁸⁵……毛⁰⁸⁶」と近接部首でもあることにより名義抄では連続して次第せられたものであろう。「△」は万象

名義では「音楽・器皿」グループ(𩇑)に近接する部首(𩇑)である。酒井氏は「瓜・𩇑」、「皿・瓦・缶」などの部首排列について各部首本文の最末字をも考慮に入れて字形上の連繫を見て行こうとされるが、名義抄の実際の使用者としてはこれではかえって面倒であり実用に適するものとはいえない。筆者は意義による類聚が基本をなしているという立場をとることによってはじめて名義抄が辞書としての役割を十分果しうるものと考えているのである。酒井氏が右の部首について「大広益会玉篇では卷十五、十六、十七に近接して存在する」と言われるのは実は玉篇の意義類聚が名義抄に流れこんでいることを意味することに外ならない。

一方、新撰字鏡の部首との関係を考えれば一覧表に示したごとく新撰字鏡の「器皿・調度」グループとは二部首(瓦・缶)のみの対応であるが、他に「辞・雑」グループについては「斤・矢・四・方……」部首をはじめとして編入部首をも考えると計十六部首(それも序列を整理すると連続部首がつづいている。)がそれぞれ対応することになり、いわば新撰字鏡の「辞・雑」グループより右の十六部首を一括して名義抄の「器皿・調度」グループにまとめ編入した体裁になっている。新撰字鏡と名義抄との意義類聚による相互関係の親密さをここに認めることができると思われる。

。皮(𩇑)西(𩇑)(動物(集会・雑畜))

「動物」グループを排列したものであろうが、その中に「集会・雑畜」をも加味して次第したものと言うことができる。中で例外部首となるのは「車・鬼・風・西」の四部首である。「車」は次の「羊」字との字形上の類似(車(𩇑)羊(𩇑))によること及び新撰字鏡では「牛馬・雑畜」グループ(𩇑)に近接した部首(𩇑)であることによりここに次第せられたものであろうか。次に「鬼(𩇑)」は編入部首である「𩇑」との字形上の類似によるものであろう。「風(𩇑)」は篆隸万象名義におい

古辞書における部首排列の基準「下」

て「鬼」と近接部首(風(𩇑)……鬼(𩇑))であるところからここに「鬼(𩇑)・風(𩇑)」と排列せられたと考えることができる。最後の例外部首「西(𩇑)」は雑部をのぞけば名義抄における最末尾の部首にあたる。篆隸万象名義の部首排列を濃厚にうけついでと考えられる名義抄が万象名義の部首の末尾に位置する部首の一つ「西(𩇑)」をもって終っているのは十分に意識せられた上でのことであらう。一方、新撰字鏡との関係については、「牛馬・雑畜」グループに近接した部首が四部首(西・馬・革・車)、「動物」グループの六部首(羊・鼠・虫・龜・𩇑・魚の連続部首)、「辞・雑」グループの三部首(鬼・韋・佳)がそれぞれ名義抄の「動物」(集会・雑畜)グループに照応していることになる。

以上、各意義群について、例外部首となる諸部首についてその拠るところを説明して来た。あとにのこった「雑部」は「首」部首をはじめとしていくつかの字数少ない小部首より成り立っているがその排列については特に基準が認められないと思う。(小部首であれば部首検索の上でも特に不便はないはずである。)(「雑部」は文字通り「雑」の部であると考えたい。既述したごとく蓮成院本の雑部の整理せられた体裁は後人の手になるものと考えられるから、観智院本のごとき体裁が原名義抄の雑部の実態でもあったと考えてよい。篆隸万象名義の末尾近くに「雑」グループ(𩇑)が認められ、新撰字鏡においてもその末尾に「辞・雑」(最末尾は「臨時雑要字」がおかれている。)(グループが認められると同様に類聚名義抄がその末尾に「雑(𩇑)」(仏上篇目による)と明記することによって「首」以下の部首を並べたのは当然のことであった。「雑部」篇目の立て方も玉篇の流れにそっていることはこれでも明らかである。

(九)

古辞書における部首排列の基準について原本系玉篇の流れをくむ篆隸

万象名義の部首排列についてまず検討し、そこに部首自身の意義による類聚を第一の基準として、更に字形上の類似によって統一しようとする意図があることを知ることができた。⁽¹⁸⁾更に「玉篇」参看を明記している新撰字鏡・類聚名義抄の部首排列についても同じく意義による類聚が基本をなしていることを確認した。意義類聚による部首排列は「字鏡抄」などにおいて整理徹底されるがこれは吉田金彦氏のいわゆる韻書式分類法によるもので、むしろ類書式分類法の範疇に入る玉篇系統の新撰字鏡・名義抄などとはちがうようである。また、名義抄における例外部首の検討より、新撰字鏡の「辞・雑」グループより流れこんだ体裁になっているものが多くみられるということは両書の親密なる関係を思わせる。両書における各意義群内部においてその序列をも問題にすると異同がみられるため先学の御説では意義類聚の基準が強調されなかったごとくである。更に両辞書とも字形上の類似による部首統一が加味せられて居り、ここに玉篇系統の辞書における部首排列の基準に一貫性があることを認めることができる。⁽¹⁹⁾

酒井憲二氏の言われるごとく類聚名義抄本文の字順については「類似字形排列意識」が存することはその通りであると思うものであるが、部首排列については意義による類聚意識が基本的に存するものと思う。上代より「玉篇」が小島憲之氏のいわれる「訓詁的類書」⁽²⁰⁾として広く用いられたことを考えあわせれば、辞書作製にあたって「玉篇」が座右に置かれたことは当然なことであり、人々の習熟した玉篇の部首排列の基準を踏襲とまでは行かなくとも大いに参考にしたことは実用性を重んじる辞書の性格からしてもこれまた当然のことであつたろうと思う。

注(18) 注(2)同書368べ、。印筆者。以下同じ。

(19) 注(6)同書8べ

(20) 注(7)同書。他に「三宝類字集」複製解題(天理図書館善本叢書、和書之

部、第二巻、八木書店)26べでも同じく言及され、更に本文の配列については、法華経の要素ありと言われる。

(21) 注(8)同書198べ

(22) 他に、吉田金彦氏は「辞書の歴史」(講座国語史、第3巻「語彙史」所収、大修館書店)で、「字形類似の排列意識によっておりモデルの基本は玉篇にあったようである」(471べ)と簡単に記して居られるにすぎない。

(23) 注(6)同書8べ

(24) 注(2)同書369べ

(25) 渡辺実氏は、「前六帖字書」は「前高山寺本」に他ならないとされる。

(26) 注(20)の中、「三宝類字集」複製解題21べ

(27) 蓮成院本においては整理せられた「雑部」になっているが、これは後人の手によるものと推定されている。注(7)同書。

(28) 注(25)同書25べ、注(7)同書にも同じ言及あり。

(29) 注(8)同書、以下特にことわらない限り、同書による。一々あげることをしてない。

(30) 注(7)同書391べ

(31) 本稿においては篆隸万象名義の部首排列については詳論を避けているのでこの点についての論及は別稿にゆずる。

(32) 注(8)同書において詳論が見られ、本文の字順についての氏の御説は動かぬものと思う。

小島憲之「上代に於ける字問の一面」(文学、昭46・12、70べ)

—原本系玉篇の周辺—

(昭和四十七年九月三十日受理)